

臨時写真科に次いで大正十二年には小西写真専門学校も設立され、従来の写真師やアマチュア写真家とは一線を画するプロフェッショナルな写真家が誕生する基盤ができて行った。

② サンフランシスコ万国博覧会

一九一五年（大正四年）の二月二十日から十二月四日までサンフランシスコで万国博覧会が開催された。本校の出品については「明治四十四年 博覧会 其他諸会 出品書類庶務掛」に記録があるが、既出「東京美術学校近事」の記事（582頁）と重複する部分が多い。ただし、前者によれば、出品物のうち「日本画成績貼込額面式個」は望月尚、井上恒也、松崎孝忠、山崎善次郎、佐藤直己、植松俊郎、田上尚之、太田義一らの作品であり、「西洋画成績額面四個」（自画像肖像式、風景『奈良、港』式）については、はじめ裸体画三点を出品する予定だったのを変更して風景画とし、実際には山脇信徳の「停車場の朝」と中野營三の「春の岬」が出品されたことがわかる。「図案成績貼込額面式個」は林威三、藤岡茂男、浅野廉、小倉淳らの作であった。また、博覧会終了後「日本画成績貼込額面式個」、「図案成績貼込額面式個」および「铸造青銅鳳文香炉」、「铸造渦紋花瓶」はカリフォルニア大学へ寄贈された。この博覧会に際し、久米桂一郎は本校を休職し、博覧会協会サンフランシスコ万国博覧会出品部主幹として大正四年一月十六日より翌五年一月二十五日の間渡米した。

③ 川合玉堂起用

大正四年五月十九日、川合玉堂が教授に任命された。玉堂は本名

を芳三郎といい、明治六年愛知県栗原郡外割田村生まれ。はじめ京都で望月玉泉、幸野樸嶺に師事し、二十九年よりは橋本雅邦に学んだ。四十年文展開設以来審査委員をつとめ、文展に出品を続けた。それらは日本の四季おりおりの自然の美を描き表わそうとしたもので、その近代的なものの見方と平明温雅の画趣、安定した技術が一般の支持を得ていた。

玉堂の起用は川端玉章の辞任により後任問題が起こったときから囁かれていた。中には関如来のように、次のような積極的な提案をする人もあった。

△栖鳳は天才にて候。天才は教授としては餘りに勿體無く候。看板に名をのみ求めんとするならば兎も角、眞に子弟教育の任に當らしめんとするには、天才は餘りに自己の適所を選び過るものにて候。

△それよりは能才、俊才を擧ぐるの優れるを信ずるものにて候。而もこれとても多くは候はず。たゞ川合玉堂こそ、美術學校教授としては、最も適任者と信じ候

△玉堂は冷靜にして又己を持する極めて謹嚴なる、其作品之を證して餘り有り候。放心に流れ易き美術學生を教育するに於て間然する所なきを信ずる者にて候。

△其の家塾に於ける制規の如きは整然として、純乎たる一私譽の體を爲せる、當時稀に見る所にて候。宜なる哉、其の門を出でたる、山内多門、井澤蘇水、長野草風近くは池田蕉園の如き皆年次の淺きに關はらず、各一別才として稱せらるゝ、蓋し其の性の趨

く所に従つて、補導宜しきを得たるの致す所と可申候。

△我輩の見る所を以てすれば、玉堂は眞に一種の教育家にて候。

此の教育家を近きに捨て、遠きに栖鳳を擧げんとしたる、思ふに其の名に酔へるの致す所なるべきも、彼も一時の事也。須らく早きに順序を踏んで、川合玉堂を玉章後任として推薦せんこと、切望の至りに不堪候。知らず正木校長の心事や如何に。

(明治四十五年七月十五日『読売新聞』)

玉堂の採用に伴つて大正四年九月に日本画科の教授法およびその他の科の日本画担任が大幅に改められた(前頁「東京美術学校近事」参照)。

④ 元教授荒木寛畝の死去

荒木寛畝の死去を『東京美術学校校友会月報』第十四卷第三号は次のように報じた。

荒木寛畝畫伯の訃

帝室技藝員として南北合派の泰斗として我繪畫界に聲譽を馳せたる正五位勲六等荒木寛畝翁は、糖尿病を患ひて、去る四月下旬大學病院に入りしが、其後又癱を發し、近藤外科にて切開手術を受けしが経過は良好なりしも、高齢の故を以て衰弱甚だしく、遂に六月三日午後一時を以て卒去せり享年八十有五、洵に痛惜に堪へざるなり。

葬儀は同月六日谷中齋場に於て佛式にて営まれたり、柩の齋場に

安置せらるゝや、同家の菩提寺牛込區辨天町淨輪寺住職は、數名の式衆を隨へて儀を始め、次で帝室技藝員總代高村光雲氏、東京美術學校長正木直彦氏、美術協會會頭土方伯(代)友人總代九鬼男(代)日本畫會總代畑仙齡氏、門人總代池上秀畝氏等、順次に弔詞を朗讀し式を終りたるが、當日の會葬者は其數七百餘名に及びたり。

翁は天保二年六月十六日江戸芝赤羽橋の邸に生る、父を文周といひ、九歳の時、狩野派の荒木寛快の門に入りしが、二十二歳の時其嗣子となり、爾來諸家の畫法を參酌して南北の法を折衷して合派を成す、曾て山内容堂公の知遇を得て、安政六年土佐藩の繪所となり、維新後は獨立して畫塾を開き、明治五年奥國大博覽會に菊花圖を出品して褒狀賞金を得、其の後今日に至るまで、内外博覽會展覽會等に出品して金銀賞牌を受くる事限りなし、十五年には宮内省御用畫を勤め、二十年 皇居御造營の際には御杉戸を畫き、廿三年の博覽會の折 陛下行幸に際して御前畫の榮譽を荷へり。廿六年四月五日女子高等師範學校より繪畫授業を囑託せられ、三十一年四月廿八日東京美術學校教授に任ぜられ、高等官六等に敘す。同年六月十日正七位に敘す。卅三年七月六日東京工業學校より繪畫授業を囑託せらる。三十四年七月廿一日帝室技藝員を命ぜられ、また内國博覽會、臨時博覽會、東京博覽會、若くは文展其他公私の審査員として斯道に盡す所多く、本校に在りては孜孜として後進の教養に努め、果進して四十年三月十一日從五位に至り、同十二月二十七日勲六等に敘し瑞寶章を授けらる。同四十年八月廿九日依願本官を免ぜられ、特旨を以て正五位に敘せ